

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第825号 平成26年10月27日

## ギャンブル依存

厚生労働省の調査によると、ギャンブル依存症の疑いのある人は536万人と推計されるという事ですが、成人の4.8%、男性に限ると8.7%という数字は、米国の1.58%と比較すると際立って高い水準となっています（8月21日付朝日新聞等から）。

報道によると、調査は昨年、全国の成人約7千人を無作為に選び、この内4153人から回答があったとしています。この中で「意図していた以上にギャンブルをしたことがある」など一定の条件に当てはまる人を「病的賭博（ギャンブル依存症）」の疑いがあるとしています。

今回の調査を担当した国立久里浜医療センターの樋口進院長は「パチンコやスロットなどが身近で、日本は世界の中で病的賭博の割合がもっとも高い国の一つ（8月21日付朝日新聞から）」としていますが、これは不名誉な記録というしかない様子がありません。

ギャンブル依存症というのは、良くないと知りながら自分の気持ちをコントロール出来ない、「止めたいのに止める事が出来ない」というものです。これは明らかに病気ですが、ギャンブル依存症は本人を不幸にするだけではなく、家族を含め周りの者を不幸の連鎖に巻き込んでいきます。

周囲のいう事に耳を貸さず、借金してまでギャンブルにのめり込み、家庭は崩壊し、最悪の場合は犯罪にまで手を染める、ギャンブルを巡るそうした不幸な出来事は枚挙にいとまがありません。

鳥取大学の尾崎米厚教授（環境予防医学）は、パチンコ等身近なギャンブルが全国どこにでもある事が海外より高い原因ではないかと指摘していますが（8月21日付毎日新聞から）、確かに、私達の周りには比較的気軽にギャンブルを楽しむ（手を染める）機会が転がっています。

ギャンブルは、そもそも射幸性が高く、しかも稀に勝ったりしますから、始めたらなかなか止められない様に出来ています。それは、子どもがテレビゲーム等にはまって止められなくなるのと同じで事です。

また私達は、パチンコ屋が生活の場に近いところにあり、パチンコをしている人も身近に見ているせいか、ギャンブルに対する抵抗感や免疫力が弱くなっているのかも知れません。

そんな中、日本国内でカジノが解禁されたら、一体どうなる事でしょうか。昨今の、危険ドラッグの服用による事件事故が多発している現状を見ると、人間の誘惑に対する心の脆弱性を強く意識せざるを得ません。

私は、仮に日本国内でカジノが解禁された場合には、今まで以上にギャンブル依存症が増える可能性は否定できないのではないかと思います。こうした中で、ギャンブル依存症の問題をないがしろにしたままカジノを解禁する事は避けるべきであり、仮に、カジノを解禁しようとするのであれば、ギャンブル依存症のリスクを如何に回避するか、この極めて難しい問題についてしっかりと議論し、対策を講じていただきたいと思います。（塾頭：吉田 洋一）